令和5年5月　東京大学医学部附属病院　地域医療連携センター

東大病院 地域医療連携センター通信

第10号
2023.5

病院長　田中 栄　挨拶

2023年4月から病院長を拝命しております田中でございます。

地域の医療機関の先生方におかれましては、日頃より東京大学医学部附属病院（以下、東大病院）へのご理解・御支援並びに緊密な医療連携にご協力を賜り、この場を借りて厚くお礼申しあげます。

東大病院は、その前身である神田お玉ヶ池種痘所から数えると、160年以上の歴史を有する、わが国を代表する病院のひとつです。東大病院は、「臨床医学の発展と医療人の育成に努め、個々の患者に最適な医療を提供する」ことを理念としていますが、これは「患者さんの意思を尊重し、個々の患者さんに安全で確実な医療を届けることを目指し、その目標を共有できる、優れた医療者を育てる」ということです。私たちは「患者の意思を尊重する医療の実践」、「安全な医療の提供」、「先端的医療の開発」、「優れた医療人の育成」という目標を掲げて、この理念の実現に取り組んでいます。

診療面では高度な医療を担う特定機能病院として、ロボット支援手術、がんゲノム医療、臓器移植などの最先端の医療を担い、東京都の総合周産期母子医療センターとしてリスクの高い妊娠・出産、そして新生児医療に取り組んでいます。新型コロナウイルス感染症流行の際には、多くの重症・中等症の新型コロナウイルス患者を受け入れることで、行政と協力体制を築きながら地域の感染症対策に貢献してきました。

一方で地域の医療機関の皆様から、「敷居が高く、紹介のハードルが高い」、「難病関連疾患以外は紹介しにくい」等のご意見もいただいており、当院の地域医療連携を推進していく際の解決すべき課題として理解しています。この課題解決に対する取り組みとして、昨年度は27の医師会へ瀬戸前病院長を中心に訪問し、「医師会が主催する勉強会などへの講師派遣」や「東大病院の医師と相談できる診療科直通電話のご案内」等、当院が進める地域の医療機関との連携策について説明し、医師会会員の皆様へ資料を配布させていただきました。今年度は、昨年度訪問できなかった医師会も含めて、さらに多くの方々に当院の取組みを紹介していきたいと考えております。

今後もご紹介いただいた患者さんに対して、より良い医療を提供すべく、地域医療機関の先生とも連携を充実させながら取り組んでまいります。引き続き当院の活動にご協力・ご支援を賜りますよう何とぞよろしくお願い申し上げます。

▲院長挨拶動画

TOPICS

新年度の挨拶
センターの紹介
　メディカルサポートセンター
　SLEセンター
連携医療機関の案内

東大病院
The University of Tokyo Hospital

総合患者サービス部 挨拶

総合患者サービス部
部長・副院長
笠井　清登

2023年4月より副院長とともに総合患者サービス部長を拝命させていただきました笠井でございます。平素より当院総合患者サービス部の活動へのご支援とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

総合患者サービス部は、2019年4月に患者さん向けサービスのさらなる向上を目的に、患者相談・臨床倫理センター、がん相談支援センター、地域医療連携センターの3部署を再編し、設置されました。

再編後、地域医療連携センターは、地域医療機関の先生方から患者さんをご紹介いただきやすい体制を整えるために様々な改革に取り組んでまいりました。

しかしながら、地域医療機関の皆様に御回答いただいたアンケートでは、「専門性が高すぎるため、どの専門外来へ紹介すればよいのかわからない」等のご意見を複数頂戴いたしました。今後はいただいた御意見をもとに、当院の専門外来の紹介情報を発信、初診予約の簡素化、診療科直通電話の充実等を行いたいと考えております。アンケートにつきましては、今年度も実施させていただきますので、是非とも皆様のご意見をお聞かせください。

今後も、当院は特定機能病院として高度医療・先端医療を提供する使命を果たすことを目的に活動を続けて参ります。引き続きご支援を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

【地域医療連携センターのこれまでの取組み】

2019年　地域医療連携コーナーの設置
　　地域医療連携通信の創刊
　　医師会へ医師会主催の勉強会への講師派遣の提案
2020年　オンラインでのセカンドオピニオン開始
　　オンラインでの地域医療連携会の実施
2021年　予約センターの医療機関からの受付時間の拡大
　　地域医療機関へのアンケート開始
2022年　診療情報提供の窓口開設
　　インフォメーションボードの設置

地域医療連携センター 挨拶

センター長

センター長
住谷　昌彦

2019年より地域医療連携センター長を務めております住谷昌彦でございます。

医師会、歯科医師会の先生方、また地域の医療機関の先生方には、日頃より当院との医療連携に対し格別のご高配を賜り、感謝申し上げます。地域医療連携センターには主に4つの役割があり、1.外来受診支援（地域医療機関からご紹介頂いた患者さんの一般初診の外来枠のほか、専門外来枠、医師個人枠を含めて予約などの諸手続きを行っています。）、2.入退院支援(難病や医療依存度の高い患者さんに対して、在宅移行支援では往診医や訪問看護、介護保険サービスの調整をし、安全かつ安心して退院できるよう支援しています。転院支援では、一般床や地域包括ケア病床への調整も行います。）、3.在宅療養支援（外来に通院している患者さんの在宅療養を支援するために、令和3年度より社会福祉士、看護師が担当して療養相談外来を開設しています。）、4.外来逆紹介の機能強化（当院と地域医療機関の役割分担を明確化し、また、地域医療機関と連携して高度急性期医療を提供することに取り組み、現在外来患者さんの逆紹介率は80%以上を維持しています。）です。

東大病院は、大学病院の使命である診療・教育・研究を遂行するため、「臨床医学の発展と医療人の育成に努め、個々の患者に最適な医療を提供する」ことを理念とし、患者さんへの最高水準の医療提供を目指して、小児・周産期医療、移植医療、がん医療等のさらなる充実や、高度急性期医療・先端医療の提供に取り組んでおります。その一方で、文京区本郷という立地と、1858年（安政5年）に神田お玉ヶ池種痘所として始まった長い歴史をもつことから、近隣から受診される患者さんも多く、地域の皆様に支えられながら地域に根差した医療にも力を入れております。

連携に当たっては、医師会が主催する勉強会への講師派遣、当院地域医療連携会等も通じて、医師会、歯科医師会の先生方および地域の医療機関の皆様と緊密に情報交換を行っていきたいと考えております。お気づきの点がございましたら、迅速に対応させて頂きたいと思っておりますので、ご連絡いただければ幸いです。

地域医療連携センター 挨拶

看護師長

師長
髙梨　陽子

4月より地域医療連携センターの看護師長に着任しました髙梨です。医師会、歯科医師会の先生方、地域の医療機関の皆様方には、日頃より当院との医療連携に対し格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

当センターは、入院患者さんの退院後の生活を見据え、地域の医療機関との連携や福祉サービスへの橋渡しを推進すべく、1997年当時の病院長の一声で、「医療社会福祉部」として誕生しました。開設当時は、医師2名、看護師1名、ソーシャルワーカー1名、事務員1名と小さな部門でした。その後、院内外からの要請に応えるべく「地域医療連携部」と改組し業務内容を拡大しながら、2019年に総合患者サービス部「地域医療連携センター」と改編され、現在は、センター長医師1名、看護師21名、ソーシャルワーカー4名、事務員5名で運営しています。

当センターの看護師とソーシャルワーカーは、主に患者さんとご家族の療養に関するサポートを担っています。その主な業務は「入院支援」と「退院支援」で、日々多くの入院患者さんや外来患者さん及びそのご家族の支援を行っています。

「入院支援」では、入院予定が決まった外来患者さんに対し、看護師が入院前に患者さんと面談し入院生活についてのオリエンテーションと生活情報などの情報を収集しています。その情報は、病棟看護師・薬剤師・栄養師に引き継がれ、入院時から「患者さん中心の医療の提供」ができるよう取り組んでいます。具体的には、手術前に指示通り休薬指示が守られているか、食物や薬剤アレルギー、ADL、身体の障害の程度、介護情報など、入院時から対応すべき情報を事前に得て、より安全に安楽な医療と療養環境を提供できるように努めています。

次に、「退院支援」では、院内外の多職種の方々と連携し、患者さんやご家族が住み慣れた場所で安心して過ごし続けられるよう、地域の医療機関をはじめ、介護、福祉サービスの方々のお力を得ながら支援を行っています。地域医療連携がより一層その重要性を増す中、当院は全国各地の患者さんの来院があるため、すべてにおいて顔が見える連携とまではできませんが、その分きめ細やかな対応をスタッフ一同心がけております。

東大病院地域医療連携センターは、これからも地域の先生方とともに患者さんを中心とした医療連携の構築と推進に取り組んでまいります。引き続き、皆様のご支援とご協力を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

係長

係長
清水　常男

地域医療連携センターの事務部門係長の清水と申します。2021年10月より地域医療連携センターに配属となり、1年半が経過いたしました。医学部附属病院の職員としては今年で21年目なのですがこれまで地域医療連携に関する業務は初めてです。また、地域医療連携センターは、医師・看護師・MSW・事務と多職種で働く環境であり、配属当初はどのように業務を行えばよいのか右も左も解らない状態でした。そのような中でも業務に関わる仲間たちのサポートに恵まれ、さまざまな取り組みを実施することが出来ました。

【昨年度の主な取り組み】

1）新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止しておりました医師会訪問の3年ぶりの再会
2）院内のデジタルサイネージを利用した連携医療機関の検索開始
3）医療連携機関登録制度の手続きの簡略化

特に、医師会訪問や医療機関アンケートでは、東大病院の取り組みについて様々な意見を伺うことができ、地域の医療機関と当院との連携の重要さを知る貴重な経験を得ることが出来ました。

今年度は、それらの経験を踏まえて、受診相談のオンライン化や東大病院診療科案内（小冊子）の校正見直し等、連携医療機関の皆様の声に少しでも応えていきたいと思います。

また、連携医療機関の皆様とは、『メールマガジン』や『地域医療連携センター通信』で新たな取り組みについていち早くお届けするなど、コミュニケーションを取りながら連携を強化していきたいと考えております。

センターの
ご紹介

メディカルサポートセンターのご紹介

メディカルサポートセンター

メディカル
サポートセンター担当
上席係長
立石　博之

◆メディカルサポートセンター

メディカルサポートセンターは、医師から医師事務作業補助者（ドクターズアシスタント）へのタスクシフト（医師の仕事の一部を他職種に任せること）を推進することにより、医師の勤務環境の改善及び病院経営の効率化を図ることを目的として設立されました。

◆概要

当センター設立前のドクターズアシスタントは、診療科に配置され業務内容も配置先の診療科に委ねられており、病院としての統一的な業務管理に課題がありました。そこで2020年10月より、ドクターズアシスタントの業務の標準化および統括、医師からドクターズアシスタント等のメディカルスタッフへのタスクシフト・タスクシェア推進を実施し、医師の勤務環境改善を目的としたメディカルサポートセンターが設置されました。

◆組織体制

センター長、副センター長、事務職員、ドクターズアシスタントで構成されています。

◆主な活動

ドクターズアシスタントは医師の行う事務的業務を支援し、診療業務に専念できる業務環境を確保し医療の質の向上と病院運営最適化に資する活動を行っています。センター事務部門はドクターズアシスタントが行う業務を支援するための環境整備、施策の立案等を進めています。また組織の活性化のためにドクターズアシスタント定例ミーティングやメディカルサポートセンター運営会議を開催しております。

◆他院からの診療情報提供書送付依頼に関する窓口

迅速な地域医療連携への対応を目的として、専任のドクターズアシスタントが他医療機関からの診療情報提供書に係る問合せへの対応を令和4年7月から開始しています。
運用開始以前はフロア受付の回線が混雑しており、他医療機関からの問合せ等が繋がらないことが病院として大きな問題でしたが、上記の取り組みを開始したことでフロア受付への電話混雑が解消したとともに円滑な地域医療連携にも貢献しています。

上記の一連の流れとしては、他医療機関からの診療情報提供依頼に対する電話を交換室が専任のドクターズアシスタントに転送し、内容を確認した後に担当医への連絡とFAX送受信から原本発送等の事務手続きを行っています。

◆医療機関同士での外来受診予約の窓口

地域医療機関との連携と患者サービスの向上を目的として、医療機関へ患者さんを紹介する際に、紹介先医療機関への予約は患者さんを介して行わず、紹介元医療機関と紹介先医療機関が連携して予約をするシステムを設置している医療機関が見受けられます。

当院では各外来受付の看護師が医師に依頼をし、医師自らがこれらの作業を行っており対応にかなりの時間を割いていました。そこで医師の働き方改革の一環として、ドクターズアシスタントによる紹介先医療機関への予約代行業務支援を開始しました。（令和5年1月から開始）

◆働き方改革に不可欠な業務軽減のための職種として

ドクターズアシスタントは近年、医師事務の補助者としての役割を超えて、医療現場に欠かせない一員となっていると考えています。医師の業務軽減のために生まれた職種であることを常に意識することでチーム医療に大きく貢献できると考えています。今後はドクターズアシスタントの行った業務の成果を客観的に示す環境を作ることで、次への目標設定に活用できるだけでなく、やりがいや達成感も感じることもできる職場環境を作りたいと考えています。

仮に代行業務を1件請け負うと平均5分程度の医師の業務を削減できるものを、1か月50件とすれば結果として250分の医師業務の削減効果を生み出し、このように表現していくことで説得力も増し、やりがいも感じることができます。
その空いた時間を新たな成果を生み出す業務に充てていくことで経営改善に繋がります。

その中で地域連携は病院にとって、すでに必須の活動となっていますが、とにかく医師の事務作業が多く、手間のかかる活動の一つであると考えました。この活動は、地域へのタスク・シフティング／シェア活動の視点としても有用であります。これらの業務を詳細にタスク分解して、役割をドクターズアシスタントへシフトすることで、さまざまな効果をもたらし始めています。

◆逆紹介率の向上を目指して

当院は逆紹介率の向上を目指しています。まずは逆紹介予備軍を「日当点200点未満の患者」と定義します。この層は、いわば治療度の低い患者さんです。各診療科の該当する患者を抽出して、抽出した患者リストをドクターズアシスタントから、主治医にチェック依頼を行います。逆紹介のタイミングコントロールは従来、医師が担っていたタスクではありますが、チェック患者さんの次回予約日と照合して、逆紹介状の代行作成をドクターズアシスタントが請け負います。逆紹介説明で患者さんの不承諾があった場合は、医師の負担緩和のために、すぐさま、医事課の職員にバトンタッチして再診時選定療養費の説明をするプロセスとすることも可能と考えています。更なる効率化につなげる人材のタスク・シフティングだけでなく、ルールや仕組みの改善にもメディカルサポートセンターは取り組んでいく予定です。

メディカルサポートセンター長
久米　春喜

メディカルサポートセンターのご依頼方法

診療情報提供
窓口開設のお知らせ

この度、迅速かつ円滑な地域医療連携の向上を目指し、
診療情報提供のご依頼に対応する専門の窓口を開設いたしました。
ご依頼の際は下記ご確認の上ご連絡いただけますと幸いです。
何卒よろしくお願い申し上げます。

【担当窓口】
メディカルサポートセンター

依頼方法　下記代表番号におかけいただき、「診療情報提供依頼」の旨お伝えください メディカルサポートセンターにつながります。

連絡先　03 - 3815 - 5411 (代表)

受付時間　8：30 ～ 17：00 月～金（祝日を除く）

東京大学医学部附属病院

【お願い】

- ご依頼の際は「診療情報提供依頼文書」(書式に決まりはありません)をご用意ください。
- 診療情報提供書の作成に日数を要し、ご希望の期日に沿えない場合がありますので予めご了承ください。
- メディカルサポートセンターでは、患者さまからのご依頼はお受け付けしておりません。
- その他、診療情報に関するご不明点、お問い合わせはお電話でご相談ください。

センターのご紹介

国内初のSLEを専門とした診療センターです。

SLEセンター紹介

SLEセンター長
藤尾　圭志

SLEセンターについて

東京大学医学部附属病院の全身性エリテマトーデス（SLE）センターは、国内初のSLEに特化した診療を行うセンターです。SLEは代表的な自己免疫疾患であり、免疫異常を基にした炎症や臓器障害が生じる非常に複雑な疾患です。今まではステロイドに代表される非特異的な免疫抑制療法が行われてきましたが、薬剤性障害の蓄積による副作用の問題は解決できませんでした。近年の診療と研究の進歩により、それぞれの病態、患者さんごとの免疫異常の特徴と、それに応じて選ぶべき治療が徐々に明らかになってきました。そのような知識を元にした最適な治療により、患者さんの病状を改善して、できる限り通常の日常生活を送っていただくことがSLEセンターの目標です。

SLEは若い女性が罹ることも多く、長い生涯を見据えて治療を選んでいくことが必要です。中でも妊娠、出産といったライフイベントが患者さんの人生にとってとても重要であると、私達は考えています。そこで、当センターではアレルギー・リウマチ内科、皮膚科、腎臓・内分泌内科、女性診療科・産科が密接に連携して、患者さんのライフイベントをサポートする体制を作りました。この4科の豊富な診療経験により、SLE患者さんの様々な症状や合併症に対して、一つの診療科の枠に留まらない最適な医療を提供することができます。
最近では、SLEの免疫の異常の解明に伴い多くの新しい治療薬が開発されています。SLEセンターは複数の最新の臨床治験に参加しており、患者さんと相談しつつ症状に合った治験の薬を選ぶことができます。

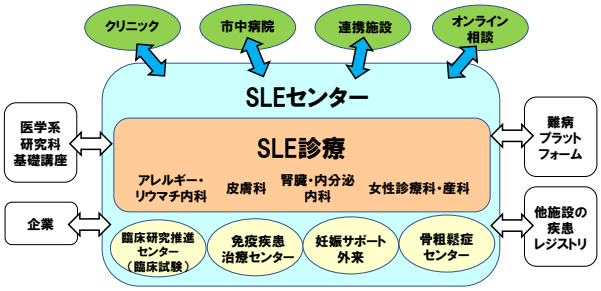
初診は予約制ですが、病状の進行が心配な場合などは早めに対応することもできます。また、紹介状の準備が困難な場合には個別にご相談を受けています。どうぞお気軽にお問い合わせください。

東大病院SLEセンターの取り組み

SLEは、若い女性に発症しやすい病気です。免疫の異常が関与するといわれており、ステロイドなどの免疫抑制療法により短～中期的な生命予後には大きな改善がみられるようになりました。一方で、妊娠・出産を含めたライフステージへの影響は大きく、また加齢に伴い動脈硬化や骨粗しょう症などの問題も生じてくることが問題となっています。

また全身の多臓器に障害をきたす可能性のある病気で、リウマチ科医だけではなく、皮膚科医、腎臓内科医を含めた複数の専門医が協力して診療していくことが必要な場合もあります

東大病院SLEセンターでは、SLE患者さんに対するよりよい治療をめざすとともに、一人一人のライフステージに寄り添う総合的診療を心がけています。



1. 寛解をめざした治療

○SLEの治療目標とは

漠然と治療するのではなく、病気の勢い（疾患活動性）を複数の指標で数値化して評価し、数値目標を立てて治療を最適化する「目標達成に向けた治療(Treat to Target; T2T)」の必要性が近年提唱されています。当科もこの概念に基づき患者様ごとに最適化した治療を目指しています。

SLEの治療は大きく1. 寛解導入療法と2. 維持療法にわかれます。1は比較的大量のステロイドや免疫抑制剤を使用し、疾患活動性をいち早く抑えることで「寛解」を達成します。寛解の定義は色々と提唱されていますが、基本的にはSLEによる臓器障害がない状態と考えます。例えば腎臓の炎症（腎炎）をおこした患者様であれば、治療によって血圧、尿蛋白、尿沈渣、血液検査（血清クレアチニン）などが正常になることを指します。

一度寛解を達成もしくは低疾患活動性となった後は、2の維持療法に移行します。この段階では、良い状態を維持したまま速やかにステロイドや免疫抑制剤を最低限まで減らしていきます。

寛解維持療法で重要なことは、可能であれば薬剤中止下での寛解を目指すこと、それが不可能であっても薬剤を使用した状態での寛解を目指すことです。前者はステロイドを中止しても寛解が維持できていることを指し、後者は免疫抑制剤や最低限度のステロイド（プレドニゾロン 5mg/日以下）使用下で寛解を維持することを言います。

○LLDAS、なぜLLDASの達成が必要か

Lupus low disease activity state (LLDAS)という概念が提唱されています。LLDASはSLEの「低疾患活動性」を定義したもので、プレドニゾロンは7.5mg/日以下で主要な臓器障害がないことなどで定義されます。先に述べた薬剤使用下寛

解ではプレドニゾロン 5mg/日以下でしたので少し緩い基準になります。

なぜ寛解だけではなくLLDASを定義する必要があるのでしょうか。実は寛解の達成は理想ではあるのですが、基準がとても厳しいため残念ながら達成できないこともあります。その際に目指すべき指標としてLLDASが提唱されました。実際、LLDASを達成・維持する期間が長いほど関節炎、圧迫骨折、心筋梗塞、腎不全などの臓器障害蓄積が少ないことが示されています。またLLDASを達成することで病気の再燃が減少することも示されていますのでとても有用な指標であると考えられます。

以上のように東大病院SLEセンターでは寛解、LLDASを達成するためにT2Tの概念に則り、最新の知見に基づいて治療方針を組み立てていきます。

○新しいSLE治療薬の活用

最近、SLEの治療は大きく進歩しています。ステロイドや従来使用されてきた免疫抑制薬には、有効性は高いものの副作用の面では懸念もあり、特に長期の高容量ステロイド使用はステロイド副作用による骨粗鬆症や病的骨折、糖尿病や動脈硬化など臓器障害のリスクが高まることが知られています。SLEセンターでは、新規SLE治療薬を併用することで、なるべくステロイドを減量してSLEを治療することを目標としています。具体的にはセルセプトやプログラフといった免疫抑制剤のほかに、プラケニル、生物学的製剤（ベンリスタ、サフネロー）を、適応のある症例に用いることで、寛解・LLDASを達成することを目指しています。以上の薬剤を活用しても難治な場合には、新薬の治験も行われています。詳しくは医師にお尋ねください。

2. 妊娠を希望される、または妊娠中のSLE患者さんのサポート

○SLE患者さんにおける妊娠・周産期の問題点

SLEは妊娠可能な年齢の女性の方に多い疾患ですので、治療に際しては、妊娠や出産、育児への影響も考慮する必要があります。最近は治療成績の向上に伴い、多くのSLE患者さんにとって、妊娠・出産は現実的なゴールになりつつあります。しかし、SLE患者さんが妊娠・出産される場合には、様々な点に配慮が必要です。

まず、SLEの状態が悪いときの妊娠・出産は母児ともに危険な状態になる可能性が高いため、病気がしっかりと安定してから、妊娠・出産するようにすることが重要です。また、肺高血圧症や重度の腎機能の低下がある場合など、SLEの病状によっては妊娠に伴うリスクが極めて高く、妊娠が難しい場合もあり、そのような点について事前に評価が必要です。多くのSLEの治療薬（ヒドロキシクロロキンやタクロリムス、アザチオプリン、プレドニゾロンなど）は妊娠中も使用が可能ですが、ミコフェノール酸モフェチルなど妊娠中に使用できない薬剤もあるため、妊娠中も使用可能な薬剤で十分に病気が安定していることを確認してから妊娠を計画する必要があります。

妊娠中および産褥期はSLEが再燃しやすい時期と言われています。SLEの症状と正常な妊娠で見られる症状は一部似ていることもありますので、そのような点に注意しつつ、慎重に経過を見て、必要に応じて治療内容を調節します。また、SLEの患者さんには、抗リン脂質抗体と呼ばれる自己抗体を持っていらっしゃる方もいらっしゃいます。妊娠中には流産や早産の可能性が高くなってしまうため、必要に応じて、血の塊（血栓）を防ぐ治療を行います。抗SS-A抗体という自己抗体をお持ちの患者さんの場合には、妊娠中に赤ちゃんが房室ブロックという不整脈を起こす場合や、産まれた後に新生児ループスというお母さんの膠原病に似た症状が一時的に出る場合もあり、そのような点にも注意が必要です。

東大病院SLEセンターでは、リウマチ科医、産婦人科医が協力して妊娠・出産を希望されるSLE患者さんをサポートする周産期外来を開設しています。産科などと連携を取り、妊娠を希望された段階から出産後まで、総合的診療を行います。SLE発症後に妊娠・出産され、育児中の患者さんも多数いらっしゃいます。妊娠に向けての準備やカウンセリングなどのプレコンセプション・ケアも行っていますので、ご希望がある患者さんはご相談ください。

SLEセンターへの患者さんの紹介について

SLEセンターでは、木曜日の午前中に外来診療を行っています。初診担当はアレルギーリウマチ内科に所属する専門医が担当します。また症状や状況に応じてSLEセンターを構成する腎臓内科医、皮膚科医、産婦人科医と連携して診療を進めています。

SLEセンターは完全予約制です。SLEセンター初診枠を東大病院予約センターからお電話でご予約したうえで受診してください（リンク：初診の方へ｜東京大学医学部附属病院(u-tokyo.ac.jp)）。受診の際には、現在おかかりの医療機関からの紹介状(診療情報提供書)を持参することをお勧めいたします(紹介状をお持ちでない場合には、初診料や再診料のほかに選定療養費がかかります)。

＊緊急性の高い例、治療に難渋する例などについて、医師による転院相談を要する場合には、アレルギーリウマチ内科日直(東大病院代表03-3815-5411)までお電話でご相談ください。

医療連携登録医療機関のご紹介

いつもありがとうございます！

医療法人社団 良月会　堀 内科クリニック

■どのような患者が多いか教えてください。

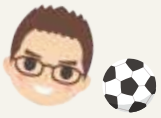
周辺企業にお勤めの若い方が多いです

■メッセージ

1999年7月に開院してから、依頼されたお仕事はなるべくお引き受けするようにしており、学校医・園医・産業医・在宅訪問診療など多岐に渡り地域医療に寄与すべく日々診療しております。また浅草医師会に入会後5年目より役員を拝命し、令和2年6月より医師会長に就任いたしました。就任時新型コロナウイルス感染症の流行拡大を認める時期であり、医師会全体でこのウイルスと戦う日々を過ごしておりました。区民の皆様が住み慣れた地域で最期まで自分らしくお過ごしになれるよう、台東区では浅草・下谷両医師会を中心に「たいとう地域包括ケア推進協議会」を立ち上げ、医療関係多職種団体と対等（たいとう）な立場で台東（たいとう）区の皆様のために連携を保ちながら日々研鑽を積んでおります。

院長：堀 浩一朗　（浅草医師会会長）
所在地：〒111-0053　台東区浅草橋1-24-3杉木立ビル3階
ＴＥＬ：03-3861-8937
ホームページ：https://horinaika.jp/
診療時間：9：30~12：45／15：30~18：15
※土曜午後　9：00~12：00
休診日　水曜午後、土曜午後、日曜・祝日
最寄り駅orバス停：
JR中央総武線浅草橋駅西口徒歩1分
都営浅草線浅草橋駅徒歩5分

ちれんのつぶやき



守野です。頻繁に友人と楽しく飲むのが趣味ですが、新型コロナウイルスの関係で、全く外でお酒を飲まなくなり友人とも会う機会がなくなりました。良いことなのでしょうか。

ところで、東京大学と言えばいちょう並木が有名です。実は竜岡門から続く桜並木も綺麗でお散歩にはお薦めです。また4月の下旬から5月上旬にかけて病院前に大きな「こいのぼり」が空を泳いでおり、患者さん、ご家族、友人に季節を感じていただける工夫がされています。医療従事者の我々も仲間と一緒に季節を感じたいですね。

今回は、最近取り組んでいる私の業務内容について紹介します。4月から38診療科と一緒に、「診療科案内」と「連携受診案内」の作成をしています。7月までには、連携受診案内をいち早く連携医療機関のみなさまにメールマガジンで配信します。患者紹介する際には活用してください。また、メール配信の希望を申請されてない方は、下のQRコードから登録してみてください！！ちなみに配信頻度は少なな目で、前回は3月です。（笑）

今年度は、連携医療機関とさらに連携強化する作戦を考えています。また新型コロナウイルスの関係で動画配信のみとしていた地域医療連携会も対面での開催を検討しております。再開された際には、是非ともご参加ください！！みなさまとお会いできることを楽しみにしています。

お知らせ

新たにメールで東大病院の情報を希望される場合は、こちらへ登録ください。
https://forms.office.com/r/SAUJCmjr1s

東大病院 The University of Tokyo Hospital
◆編集・発行　令和5年5月
東京大学医学部附属病院　地域医療連携センター（入院棟B・1階）
〒113-8655　東京都文京区本郷7-3-1　TEL：03-5800-9254
URL：http://www.h.u-tokyo.ac.jp　Email：gairai-renkei@adm.h.u-tokyo.ac.jp